

悲劇の舞台となった墨東病院
石原慎太郎・東京都知事

都立
墨東病院
Metropolitan Bokuteh Hospital
東京 墨田区 墨田
Tokyo Metropolitan

小誌キヤンペーンに猪瀬直樹 都副知事

独占インタビュー

もう東京で妊婦たらい回しは

許さない!

医療ジャーナリスト
伊藤隼也



まず、猪瀬さんがプロジェクトチーム（以下PT）のトップに就く経緯から聞かせてください。

「三十八歳の妊婦が八病院に受け入れ拒否された末、都立墨東病院で死亡した問題が発覚した十月二十二日以降、私は関連する報道を注視してきました。もちろん

「週刊文春」のキャンペーンも拝読しました。問題点が整理され、取材の行き届いた調査報道でした。『これは東京都がなんとかしなければまずい』と危機感を抱いていました」

石原都知事からはどんな話があったのですか。「十一月十四日の定例会見の前に知事と二人で話をする機会がありました。その場で私から、この問題を東京都が放置してはいけないと提案したのです。週刊文春が書いていた、札幌のような搬送先のコーディネート制度を導入することも一考に値するという話も

「十一月十四日の定例会見で発表されたのです」
「では、問題の本質はどこにあるとお考えですか。今回小誌が掘り起こした二つの「妊婦たらい回し事件」が大きな反響を呼んだのは、それが大病院が林立し、日本で最も医療資源が集中している首都東京で起こったからです。

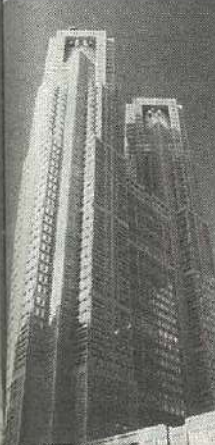
東京には総合周産期母子医療センターという妊婦にとっての「最後の砦」が九つもありますが、それが逆に無責任なたらい回しを生む要因にもなっています。一方、地方では中核病院が限られており、最終的な搬送先が一つしかないのが、物理的にたらい回しが起こりにくい。

「産婦人科の間」キャンペーンが十分に東京都を動かした。小誌の再三の追及を受け、石原慎太郎知事が「妊婦たらい回し」問題を解決するための特命プロジェクトチームを発足させると発表したのだ。そのリーダーを務める猪瀬直樹副知事に、伊藤隼也氏が聞いた。

「その通りでしょう。東京は医療のキャパシティは大きいですが、その大ききゆえに上手くコントロールできていない側面も存在する」

「今回の現象はシンプルな話なんです。東京都の医療キャパシティを『旅行カバン』にたとえるとわかりやすい。東京都は地方に比べ

小誌はこれからも東京都
の取り組みを注視する



れば大きなカバンをもって
いるのに、そこに、考え方が
バラバラの九人が荷物、つ
まり患者さんを押し込め入
りとしているからうまく入り
きらない。整理整頓ができ
ておらず、限られたカバン
の容量を最大限活用するこ
とができていないのです。
一方、地方は、東京に比
べればカバンは小さいけれ
ど、一人が工夫して荷造り
をしているので、何とか荷
物が収まっている。東京都
としてもっと上手な入れ方
を考えるべき、というのが、
私の基本的なスタンスです。
この問題は一見すると複雑
そうに見えますが、単純な
現象だと考えています」
—— その通りです。それが
いまの東京の状態です。
ところが、小誌が再三指
摘したように、東京都の担
当部局の現状認識は間違っ
ていると思います。残念な
がら、事件発覚直後、石原

「今回の事件が起きた墨東
病院のある区東部ブロック
(江東区、江戸川区、墨田区)
と、杏林大学医学部付属病
院のある多摩ブロックは、
かねてから産科医療の脆弱
性が指摘されてきたのは事
実。しかし、多摩当番の
ような弥縫策以外、根本的
な解決策が打てなかったの
は残念に思います」
—— 今ある施設やマンパワ
ーをもっと有効に活用する
ことはできると思います。
たとえば、総合周産期セン
ターでは正常分娩を一定数
で制限する。そうすれば、本
来引き受けるべきハイリス
クの妊婦さんをキャパシテ
ィの問題で断るようなケー
スは減らせるはずで。

日本の周産期医療を変える

き続けられるような環境作
りへの対応も遅れている。
しかし、責任を医師不足
に押し付けても問題は何も
解決しない。都内だけで年
間十万人以上の方が出産さ
れているのですから、医師
が増えるのを十年間、指を

「病院経営の観点からする
と、正常分娩はコストパフ
ォーマンスが高いが、救急
やハイリスク分娩は儲から
ない分野。確かに行政的医
療の観点からすれば、都立
病院は民間病院にできない
ことを担うべきだという意
見にはうなずけます」
今日、お話しして痛感し
たのは、PTがまず取り組
むべきは、やはり正確な情
報収集だということです。
説得力のある正確なデー
タが集まれば、最も効果的
な対策が自ずと見えてくる」
—— 実は今回の取材の中
で、都内の各周産期医療セ
ンターに一体どれだけの搬
送依頼が行われているの
か、都に情報開示を求めた

都知事から「レアケース」と
いう発言が飛び出したこと
に、それが端的に現れてい
たのではないでしょうが。
「担当の職員から上げられ
た三十年前からの東京の妊
産婦死亡数のデータを見る
と、確かにその数は年々減
少しており、今回のように
脳出血でお亡くなりになる
方が頻繁に出ているわけ
ではありません。都知事はそ
の意味で『レアケース』と
いう言葉を用いられたのだ
と思います。しかし、受け入
れ拒否の問題については、

行政が「荷造りする人」になる

「都庁内の情報をすべて知
事に届けることは物理的に
不可能です。だからこそ、
私の出番だと思っていま
す。問題解決のために、情
報を一元化させて、縦割り
の組織に横串を刺して活性
化させる。それが私に求め
られている役割ですから」
—— 猪瀬さんが理解してい
るように第一に「荷物の入
れ方」の問題であるにもか
かわらず、いま東京では疲

今回妊婦さんが亡くなられ
たケース以外にも同様な事
例が発生していることが明
らかになったわけですが、
「もはや『レアケース』
では説明がつかない。シス
テムの問題です。だからこ
そ、私が知事の特命で取り
組むことになったのです」
—— 都知事は同じ定例会見
で「庁内から上がってくる
報告を聞くだけでは納得い
かないこともある」とも発
言されていました。都庁内
の情報伝達に問題があるの
ではありませんか。

弊した周産期センターが、
今回の墨東病院のケースの
ように、患者の受け入れを
断る理由を探してしまいう
況に陥っています。これは
明らかにシステム不全。本
当に良いシステムが構築で
きれば、どんな医師が電話
を受けてもたらい回しは起
こさず済みます」
「それは、これまで東京で
は全く有効な手立てが考え
てこられなかった、という

「今回の墨東病院の事件が
明らかになった時、東京都
の中では『搬送されてくる
患者の三割は都外からの患
者。だからベッドが満床に
なり、たらい回しが起こ
る』という主張もありまし
た。しかし、それは違う。
東京都は千二百万人の人口
に加え、その近郊に暮ら
し、東京に通勤する三百万
人の方々も含めて東京都民
なのだと思えます」
石原知事も常々、東京の
公務員は『一二〇点満点』
で評価されると言っていま
す。一〇〇点は東京のた
め、残りの二〇点は日本の
ために働いてこそ認められ
る。それぐらいの気概で働
くことこそ、『首都公務
員』の責務なのです。
私も東京から日本の周産
期医療を変える覚悟で、P
Tのリーダーを務めます」

意味ですか」
—— すべてがそうだとはい
いません。日赤医療センタ
ーの助産師と連携するセミ
オープンシステムや、日本
医大多摩永山病院を中心と
した地域医療機関のネット
ワークなど、知恵を出し合
っている病院や地域もあり
ます。今回の事件の舞台と
なった墨東病院も、救命救
急センターや新生児科はと
てもがんばっていて、医療
関係者の間では『東京の医
療の宝』とまで評価されて
います。

「そういった医療資源をマ
ネージメントし、効果的に
コントロールすることこそ
が、行政の役割ですね」
—— まさに、それができて
いなかったのです。現状で
はすべてが現場の医師に丸
投げされており、現場は疲
弊するばかりでした。もし
て何より、搬送先が何時間
も見つからないのは、妊婦
さんのご家族にとっては悲
劇そのものです。今回の事
件の当事者になられた二人
の妊婦のご主人は、その悲
しみを受け止めつつ、『二

度と同じ悲劇を繰り返さな
いための対策を」と訴えて
います。
「そこで東京都としても具
体的に参考にしたと考
えているのが、札幌市のコ
ーディネーター制度です。こ
れは先ほどのたとえ話で言
えば、行政が責任をもって
「荷造りする人」になると
いうことでしょうか」
—— はい。専門のコーディ
ネーターが一箇所で集中的
に搬送先の照会をするた
め、現場の医師が電話を片
手に何時間も搬送先を探す
ということがなくなる。こ
れで現場の負担はかなり軽
減されるし、患者さんの搬
送までにかかる時間も格段
に短縮されるはずで。

「もう一つ付け加えると、
東京都の荷造りが上手くな
かったことは認めますが、
問題の大きな背景に、日本
全国で産科医の絶対数が不
足しているという事実も忘
れてはならないと思いま
す。これは長年にわたる厚
生労働省の失策の結果でし
ょう。女医さんが増えてい
るのに、彼女たちが生涯働